

## IV期 (一般)

受験 番号		氏 名	

令和5年度

武蔵野大学 専攻科 言語聴覚士養成課程 入学試験問題 (1月8日)

### [ 国語総合 ]

#### 【一】言語の獲得理論について書かれた次の文章を読んで、以下の問いに答えなさい。

制約理論に対してトマセロ(2001)が社会的相互作用を重視する立場から興味深い議論を展開している。まずトマセロは、<sup>①</sup>制約理論で前提とされまたよく実験パラダイムに組み込まれている名づけ(naming)に異を唱えた。名づけは、何かを指示して「これは〇〇です」と事物の名称を言う行為のことであり、こうして与えられる定義を、「明示的指示定義」(ostensive definition)とも呼ぶ。事物とラベルが時間・空間的に同時提示されるので、事物とラベルが連合しやすく子どもは学びやすいと従来考えられていた。しかしトマセロは、欧米の中流家庭では一般的なこのような名づけゲーム(naming game)は、他の多くの文化圏ではほとんど行われず、と指摘する。さらに、「欧米の中流家庭でも必ずしもしばしばこうしたゲームを行っているわけではない」と述べる。名詞、あるいは動詞は、片づけるべきおもちゃを大人が指さして“Put your toys away”「おもちゃを片づけなさい!」と発話するというような、必ずしも明示的指示場面ではない、入り組んだ文脈の中で発せられる。日本語なら、さしずめ事物を指さして名詞はまったく言わず(日本語の文法はそれを許すので)「お片づけしなさい!」と言うところだろう。このように<sup>②</sup>事物は指さされたとしても、指示定義が必ずしも与えられるとはかぎらないのである。

トマセロは明示的指示定義ではなく、<sup>③</sup>さまざまな大人の行動を統制している大人の「意図」を読みとることこそが、ことばの意味獲得のために重要であると考えている。この点をトマセロに先駆けて明確に実験的証拠を示したのが、ボールドウィンによる<sup>④</sup>「不一致ラベルづけ」(discrepant labeling)の研究であった(Baldwin, 1991, 1993;図略)。不一致ラベルづけとは、子どもが何かを注視しているときに、注視している対象の名称ではなく、たまたままったく別の事物の名称を大人が発することを指す。大人は、必ずしもいつも子どもの注視の方向を把握してそこにある事物の名称を教えている、というわけではない。たとえば子どもがトラックのおもちゃをつかんでガンガンと積み木の箱にたたきつけ、むしろトラックのおもちゃに注目し遊んでいたときに、母親はこのやや乱暴な行動に変化を持たせようとし、別の事物を注視して、「あ、電話がある。もしもーし。」と発話するかもしれない。この場合、与えられたラベル(電話)は、子どもが注意している事物(トラック)の名称とは異なっており、ラベルづけは不一致の状態にある。トマセロ(Tomasello, 1997)によれば、子どもが何に注意しているかフォローするのに非常に熱心な欧米の中流階級の養育者の場合でも、不一致ラベルづけはラベルづけ全体のおよそ30~50%もの高率で起こるといふ。上の例を考えれば、その高率は容易に予測できよう。

トマセロによれば、実は不一致ラベルづけは子どもが間違ったラベルを学んでしまう危険性をはらんでいる。上の例でいえば、子どもはたまたま注視していた〈トラック〉に「電話」というラベルを付して覚えてしまうかもしれない。これを防ぐにはどうしたらいいのだろうか。それは、子どもがラベルづけをしたときの大人の様子に注意し、大人が何を指示して名称を言っているのか、という大人の意図、すなわち「指示の意図」(referential intentions)を確認することであろう。トマセロによれば、子どもはラベルづけにおける誤りを回避するために、次の2つのことを知っていなければならない。

1 発話において何が指示されているか特定できるのは、話し手に他ならないということ。

2 指示されている対象について、話し手は、発話以外に動作など非言語的の手がかりを示すということ。

ボールドウィン (Baldwin, 1991, 1993)は子どもが大人の指示の意図をみずから能動的に抽出できるかについて調べるために、まず子どもに 2 つの目新しいおもちゃを見せた。そしてそのうちの 1 つを子どもに与え、もう 1 つは実験者のそばに置いた。子どもが与えられたほうのおもちゃに注意を集中させて遊んでいるときを見計らって、実験者は、もう一方のおもちゃを注視しながら “A toma!” (トーマだ!) と叫んだのである。心理学実験の例にもれず、もちろん「トーマ」とは、新奇語として提示するための無意味シラブルである。すると、生後 18 ヶ月以上の子どもであれば、なんと 90%以上の子どもが等しくほぼ同じ行動をした。それは、新しいラベルを聞くやいなや即座に実験者の顔を見、何を見ているかチェックしたのである。しかもあとで実験者が先ほど見せた 2 つのおもちゃを再び見せて、トーマを探すように教示すると、子どもは自分が集中して遊んでいたおもちゃではなく、「トーマ」と聞いたときに実験者が見ていたほうのおもちゃを正しく選ぶことができた。不一致ラベルづけに惑わされて誤った選択を行うようなことは皆無に近かったという。

ボールドウィンの研究は、語意の獲得において、他者の視線やからだの向きなどの非言語的の手がかりを子どもが使うことが重要であることを示している。ことばを使うときからだが表示している情報や、発話者の意図を一連の文や行動から読みとるような、単語や文のレベルを超えた会話や談話における人間の能力は、「語用論的能力」と呼ばれる。ボールドウィンの研究は、この語用論的能力が、実は単語の意味を知るという言語獲得の基本的な課題においても必須のものであることを、明確に示している。

(中略)

すでに紹介した不一致ラベルづけに子どもが惑わされることなく正しいラベルを学ぶために、子どもはラベルが発せられたときの大人の視線の方向と、自分の視線の方向とを検討したのである。ここでは視線の方向を調べることが大人の指示意図の特定に直接つながっていた。しかし実はラベルづけに伴う視線は決定的な手がかりではないことが、トマセロらの他の実験により次々に明らかとなっていく。さまざまな状況の中でさまざまな形で与えられる手がかりを使うことにより、そうした手がかりの背後にある話し手の指示の意図を推測することの重要性をトマセロらは主張するのである。

トマセロとバートン (Tomasello & Barton, 1994) の実験で (図略) では、⑤ラベルづけのとき実験者は決して目標となる(ラベルづけがされるべき) 事物を見ることはない。 実験者は子ども (24 ヶ月児)の目をじっと見ながら「トーマを探そう」と言うだけである。実験者はその後いくつかのバケツの蓋を開けてみる。たとえば最初の 2 つのバケツでは、開けて中を見た実験者は不満そうな声を出す。3 つ目では興奮した様子をして、中にあった事物(ターゲット)を取り出して子どもにわたす。このときもラベルづけは行わない。この一連の出来事の後で、子どもに (バケツの中にあった) 5 個の事物を見せて「トーマを持ってきて」と尋ねると、ちゃんと子どもは 3 つ目のバケツの中にあったターゲットを持ってきてくれた。名称を聞かれば、新たに学んだ名称「トーマ」を言うこともできた。この実験では、ラベルづけをしたときの視線は手がかりとなっていない。一連の出来事の中で、実験者が何を「トーマ」として指示していたのか、という意図の推測をすることが、子どもを正しい語意の獲得に導いていたのである。

アクターとトマセロ (Akhtar & Tomasello, 1996)の他の実験では、ラベルづけがターゲットを見ながら行われなければならない。ラベルが言われたときもその後も、⑥子どもは一度もターゲットを見ることはない。 まず実験者は 1 つずつ新奇な事物が入ったバケツと、ターゲットの事物が入ったおもちゃの納屋を開けて中を見、子どもと一緒に確認する。この時点ではラベルは与えられない。その後で、実験者は「さあ、トーマを探そう」と言ってバケツを開けて中の事物を取り出す。納屋も開けようとするが、開かない。実験者は「鍵がかかっている。開かないよ。」と言って、明らかにがっかりした様子をする。これで事物提示はすべて終わりである。あとでテストすると、子どもは納屋に入っていて二度目に見ることができなかった事物に、正しく「トーマ」という語を結び付けた。

2つの実験から分かるのは、ラベルづけのときの大人の視線を判断することは、実は子どもが語意を学ぶ際に決定的に重要なことではない、ということである。なくても子どもは大人がいったい何を指示してことばを言っているのか、その指示の意図を常に探っている。わずか二歳になったばかりの子どもでも、指示の意図を探るために、きわめてバラエティに富んだ手がかりを使いこなす。それは、大人が嬉しげに興奮した様子だったり、反対に悲しげでがっかりした様子だったりという表情も含まれる。こうしたトマセロらの研究に対して、環境から1個の事物を特定し語と結び付けるだけでは語彙獲得の一部しか証明していないとし、語が名詞ではなく動詞の場合や、事物全体名称ではなく部分名称の場合は説明できないとの批判がある。これに対しトマセロらは状況によって子どもが与えられた新奇語を適切に名詞または動詞として解釈できたという研究 (Akhtar & Tomasello, 1996) や部分名称を正しく事物の部分に結び付けて解釈できたという研究 (Moll, et al., 2006) を示している。モルらは、オモチャにステッカーを貼り、オモチャを事物全体、ステッカーを部分としたとき、大人が事物全体・部分のどちらを指示して語を言ったか幼児に推測してもらった。これらの研究はいずれも会話の流れ(flow-of-conversation)の中で子どもはいかに巧みに語用論的情報を使いこなして大人の指示意図を知るかを実証的に示している。

『新・子どもたちの言語獲得』小林春美・佐々木正人、大修館書店 二〇〇八年より 一部改変

- 問一 傍線部①にあるように制約理論で名づけが前提とされたのはなぜか、文中の語を用いて60字以内で説明しなさい。
- 問二 傍線部②と同様の例で、大人が子どもに対して用いる日本語として「食べなさい」がある。なぜ「食べなさい」は②と同様の例なのか、この言葉が使用される状況を考え、70字以内で文中の語を用いて説明しなさい。
- 問三 傍線部③「さまざまな大人の行動を統制している大人の「意図」を読みとること」と同義のことばを文中から10文字以内で選びなさい。
- 問四 傍線部④「不一致ラベルづけ」とは制約理論によれば言語獲得にどのような影響を与えるのか。文中の言葉を用いて30字以内で説明しなさい。
- 問五 上記「不一致ラベルづけ」の影響は、何故、回避されているのか、文中のことばを抜き書きし、100字程度で説明しなさい。
- 問六 傍線部⑤「ラベルづけのとき実験者はけっして目標となる(ラベルづけがされるべき)事物を見ることはない。」とあるが、「実験者が見ていた」のはなんであったか。文中のことばを使って5文字で答えなさい。
- 問七 傍線部⑥「子どもは一度もターゲットを見ることはない。」とあるが、子どもが見ることが出来たのはなんであったか。文中のことばを使って50字程度で説明しなさい。

【二】カタカナ(傍線)の部分<sup>①</sup>を漢字で書きなさい。

- (一)心のキンセンに触れる。
- (二)バンジャクの備えをする。
- (三)歴史をガイカンする。
- (四)会長職をユウタイした。
- (五)前言をヒルガエす。
- (六)物資がジュンタクだ。
- (七)人違いでカンガンにたえない。

【三】次の読みをひらがなで書きなさい。

- (一)放埒
- (二)慇懃
- (三)懊惱
- (四)無謬
- (五)教唆
- (六)軋轢

【四】次の四字熟語の空欄を漢字で書きなさい。

- (一)信賞必□
- (二)内憂外□
- (三)傍□無人
- (四)竜頭□尾
- (五)明鏡□水

【五】次の言葉の意味を簡単に説明しなさい。

- (一)火中の栗を拾う
- (二)肝胆相照らす
- (三)梅檀は双葉より芳し